

三三四

世事而談

一

山崎義成大人隨筆

世事百談

全四冊

東都書肆

下谷御成道

青雲堂英文藏梓





世<sup>セ</sup>事<sup>シ</sup>百<sup>ヒャク</sup>談<sup>タン</sup>卷<sup>クワン</sup>之一<sup>ノイチ</sup> 目<sup>メ</sup>録<sup>ロク</sup>

清<sup>セイ</sup>家<sup>カ</sup>の訓<sup>クン</sup>題<sup>テイ</sup>

韻<sup>イン</sup>寒<sup>カン</sup>

俚<sup>ライ</sup>諺<sup>ゲン</sup>

淺<sup>セン</sup>草<sup>ソウ</sup>寺<sup>ジ</sup>觀<sup>カン</sup>世<sup>セ</sup>音<sup>オン</sup>

廿<sup>ニ</sup>四<sup>シ</sup>孝<sup>コウ</sup> 七<sup>シチ</sup>賢<sup>ケン</sup>人<sup>ニン</sup>

西<sup>セイ</sup>方<sup>ホウ</sup>聖<sup>セイ</sup>人<sup>ニン</sup>

ハ百<sup>ヒャク</sup>屋<sup>ヤ</sup>お七<sup>ナナ</sup>

甲<sup>カウ</sup>乙<sup>イツ</sup>人<sup>ニン</sup>

華<sup>カ</sup>甲<sup>カウ</sup>重<sup>チュウ</sup>逢<sup>オウ</sup>

天<sup>テン</sup>時<sup>ジ</sup>占<sup>セン</sup>候<sup>コウ</sup>

平<sup>ヘイ</sup>反<sup>ハン</sup>

漢<sup>カン</sup>和<sup>ワ</sup>

俗<sup>ソク</sup>語<sup>ゴ</sup>

神<sup>シン</sup>事<sup>ジ</sup>舞<sup>マイ</sup>

水<sup>スイ</sup>滸<sup>コ</sup>信<sup>シン</sup>の謹<sup>キン</sup>名<sup>メイ</sup>

日<sup>ニチ</sup>と春<sup>ハル</sup>と多<sup>タ</sup>夕<sup>セキ</sup>て孕<sup>ニ</sup>

進<sup>シン</sup>女<sup>ニョ</sup>總<sup>ソウ</sup>角<sup>カク</sup>が世<sup>セ</sup>代<sup>ダイ</sup>

男<sup>ナン</sup>子<sup>シ</sup>化<sup>カ</sup>粧<sup>サウ</sup>

嬰<sup>エイ</sup>兒<sup>ニ</sup>の多<sup>タ</sup>あて

梅<sup>バイ</sup>雨<sup>ウ</sup>

大<sup>ダイ</sup>風<sup>フウ</sup>大<sup>ダイ</sup>水<sup>スイ</sup>と知<sup>チ</sup>る

雪<sup>セキ</sup>の竿<sup>サン</sup>

李<sup>リ</sup>公<sup>コウ</sup>人<sup>ニン</sup>出<sup>デ</sup>る

彼<sup>カ</sup>岸<sup>アン</sup>

純<sup>ジュン</sup>子<sup>シ</sup>の上下<sup>カウゴ</sup>

黃<sup>ワウ</sup>金<sup>キン</sup>の壺<sup>コ</sup>

雨<sup>ウ</sup>足<sup>ソク</sup>足<sup>ソク</sup>手<sup>テ</sup> 雲<sup>ウン</sup>海<sup>カイ</sup>

帝<sup>テイ</sup>序<sup>シ</sup>の賣<sup>バイ</sup>物<sup>モノ</sup>

あきせ

ハ羽<sup>ウ</sup>白<sup>ハク</sup>小<sup>コ</sup>袖<sup>スリーブ</sup>

孫<sup>ソン</sup>寺<sup>ジ</sup>の種<sup>タネ</sup>

目<sup>メ</sup>録<sup>ロク</sup>



世セ事ジ百談ひゃくだん卷之一

過す一こ次しつゞくこれすささ小こ草くさ子こややああせてて記きしたたるるととそそののつつととううととううととああはは三さん養やう雜ざ記きとと名なづづけけししうう、のちそのその存ぞんもも存ぞん在ざいををどどめめけけししうう、のちおおののひひ出でるるままうう小こ書しよつつけけたたるる、  
ままききよよままりり事こと八はち百ひゃく條じょう子こ三さんちちととれればば、セぞぞ世よ事じ百ひゃく談だんととハ  
名なづづけけぬぬ、

清家此訓點

明經乃漢儒家の訓詁化論諸古刻本あり、その中先進  
於孔樂野人也後進於礼楽君子也と訓さば諸注釋の  
意子異なり、されどつゝある釋義化さくより何ぞいと見ん  
東坡が孔子後先進論ハ漢家の訓詁の如きところを云ふ先

進しん後ご進しんをを用もちふふををあありりかか北きた條じょう家けのの讀よみ法ぽうををあありり授あづかりり

しあづ

ひやうき  
平仄

田聲子平仄と云ハ上下の平声を平とひ上去入を平と仄  
 この平とハ宋の沈約始造四声謂上去入為仄声と古今韻  
 會子又云平仄の名宋子始まりさく平声ハ音韻化平あ  
 り平とひ上去入ハづれも声の平あぬものかれ仄と云ふ  
 なり仄ハ説文平側傾也又注漢書北夷首者古字の條  
 平古側字とあり平上去入の声ハ側傾不平あまハ仄声と  
 平古側字とあり

歎塞







沙濕履無聲と云ふ句

あふ夜に雨を待つたより雨とあれば寝るも  
向うとくきとていともなう入

王伯諤

りじんめ  
 吾人ハ唐軍ニ名所をあるといふ義あり、  
 なかう おすのなす ちやうあかんまき ややとまろ  
 物語より武親國此唐人平山の武者所すといひ、  
 ゑよま あんあへ そんなつままり いで  
 此山北常内より存知仕ていそやれ色ハ山夢子口辰ハ東國さる  
 カノ さくら やまあんをバドやお欠 ままど  
 の者れらふよりめてこそ西國の山常内者なり誠一くぐとのめ金  
 すゑあげりかねてやれぬこそは赤やうともおぢえにゆぬものなる吉野  
 もろもろ すす うじん こま  
 初年の花をバロふねども吾人があり、むきの籠りたる城のちーられ  
 あんき おやー  
 要内を六剛の武者知りやとぞやれりとあり又そきのあらう豊



後一條禪同鈔云其日注誓下食者鬼神之名此日沐浴  
浴則鬼紙頭而髮落故得之倭名類聚鈔瘡類云瘡  
須論云鬼紙頭所解為天狗人頭或如殘犬或如指  
大髮不生也番例曰歲下食ハ天狗星の糞下界ハ下イ  
食を求むる日也吉日あれば妨あり凶日あれば忌あり  
家法書拾芥鈔云下食日沐浴誦妙善王金葉女追  
救鬼參尾王波羅々鬼又云下食日毎臘戌月又  
也未正戌二辰三 寅午子申 己亥丑卯とありこ  
まゝの諸夜ハ隋唐よりくづき古傳ある云鬼紙頭ハ大  
字存せしあゝんゝれハ俗説のぐゞゞぎの約りたるあゝん  
ぐゞゞハ今の假名體也とあり

歲月のうつろひくそのまやきをたゞ光陰矢の如くとも  
と々山谷詩集小日月過箭疾と云句あり出くあゝん  
年の矢といふことも同じくろそをれれ千字又ハ年矢と  
あゝ漏刻けとく自別あり  
僧をいぢめてすと本坊をいぢると内典小似とありとて  
西教寺駒山のころ成実論云勤行故名精進乃至如優鉢羅  
鉢頭摩等隨水增長懈怠行者猶如木并後初成來  
日滅盡とありハ世諺といふ不同いと云ハ  
高野六十那智八十といふとハ男色のとれやもせふでさ  
あゝハハ紙の一状に取あり高野紙ハ一状六十枚那智ハ  
紙ハ一状八十枚ありとの言ありと云や















里、毎年六月十日の祭礼、小用、古面、ハ元久三年、此年、  
あり、奉重のう、此、あ、ハ、長刀、八、静、此、前の、持、て、  
の、と、ハ、も、握、京、景、耐、多、細、の、槍、馬、し、あり、古、書、ハ、五、書、  
を、始、め、古、本、永、享、記、ハ、城、の、東、浅、子、ハ、推、古、天、皇、御、宇、宣、居、  
二、年、子、建、立、の、不、公、法、最、初、北、雲、場、あり、関、東、兵、乱、記、ハ、大、  
永、二、年、九、月、北、初、免、古、河、の、山、に、ハ、御、使、あり、以、使、者、ハ、面、水、三、  
郎、左、右、の、尉、と、ぞ、聞、え、一、の、帰、り、ハ、面、水、武、義、の、浅、子、ハ、参、詣、  
し、る、小、その、日、觀、者、北、縁、日、と、十、日、の、事、あり、常、あり、  
人、層、表、す、中、畧、浅、子、ハ、仁、王、廿、四、代、推、古、天、皇、の、山、耐、宣、居、  
二、城、年、建、立、也、奉、重、ハ、聖、觀、音、園、東、最、初、北、山、藍、雲、願、を、興、へ、  
要、あり、權、の、舊、説、不、思、議、此、事、舊、記、ハ、載、る、不、可、勝、計、

と、る、と、入、さ、て、この、宣、居、と、る、ハ、古、年、号、子、て、逸、年、年、表、子、  
載、た、れ、と、逸、年、年、表、子、ハ、古、本、水、鏡、古、代、年、号、年、代、記、皇、  
代、記、神、明、鏡、海、東、諸、國、紀、を、引、證、し、推、古、天、皇、十、  
九、年、を、宣、居、元、年、と、し、志、る、子、今、不、載、る、永、享、記、屋、東、  
兵、乱、記、の、二、書、ハ、宣、居、二、年、と、ある、子、よ、れ、ハ、推、古、天、皇、廿、五、  
年、を、元、年、と、す、る、あり、逸、年、年、表、ハ、宣、居、一、年、を、推、古、  
づ、ハ、又、奉、重、聖、觀、音、と、あり、て、今、も、現、子、の、此、事、ハ、あり、つ、  
人、の、拜、を、な、さ、と、く、聖、觀、音、と、あり、て、今、も、現、子、の、此、事、ハ、あり、つ、  
一、面、觀、也、と、ある、子、た、ハ、い、さ、や、あ、ん、あ、ん、人、の、田、國、雜、記、を、  
證、と、して、浅、子、の、佛、を、疑、ふ、ハ、謬、子、ハ、耳、を、信、と、目、を、疑、ふ、  
と、ふ、子、ひ、く、非、あり、



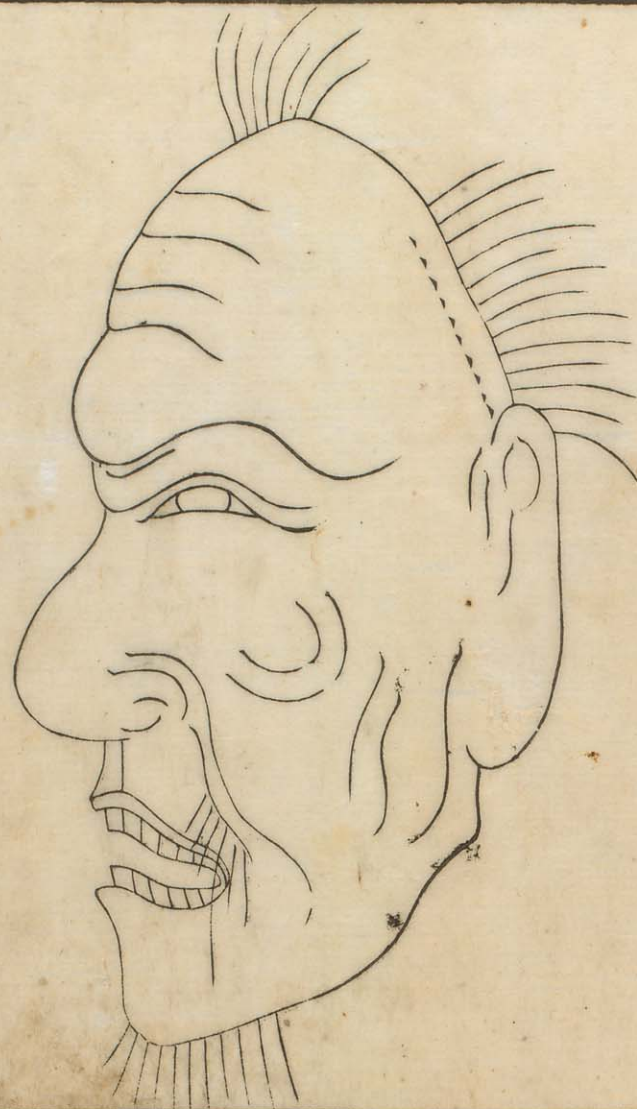
浅草寺神事舞

浅草寺は一年の中子七十五度の行事ありその中三月十  
 八日の田樂をとりと六月十五日は神事舞は古風を存して  
 そのうちれきづを觀るは是れなりとて神事舞子用台  
 こそその古假面すゞふつありその最々きあめと翁  
 大夫といひく元久の年号あり次子三人大夫と稱する假  
 面三つありこれハ三社権現ありよりその外孫田原大  
 井やまの福女の假面ありやうとてこの孫女ハ細女御あり  
 了るの神事ハ神官田村氏の職掌なりとてふふふ  
 月十五日午の時社家五人この假面をまき馬より二  
 五門をうりて本堂の前あり舞臺北西の方あり本堂

のうろをまきりてとて神官以下の社家二人をフルと  
 これハ二五のよりうりて本堂をめぐり三社権現まきり  
 祝詞をよみ拍板をもちてふふ人舞臺子ののりて舞  
 ふこの舞をうりて階をうりて供所の内よりおめく徳院  
 へ入る次子神官及び社家二人とてふふ舞臺子ののりてその  
 一人ハ幣と錫杖を手にとりてちち舞曲ありあゝ舞の  
 舞ありこの二段を翁大夫の舞とて元久の古假面を  
 きく舞ありこの舞をうりて孫子三人を夫れ舞あり  
 毎年六月十四日登礼の前日田村氏より舞の擔古あり  
 一々政甲申の年谷丈二西原接はくこゝ田村氏より  
 て舞をも古假面をもることをうり



翁才夫の假面



一十

翁才夫の假面のうゝ子あゝとてこれ年号左の奴

元久三年

三月十八日

孫田彦の假面のうゝ子あゝとてこれ年号左の奴  
 の名と花押ありあゝの四面子八年号あゝとてこれ年号左の奴  
 鈕きとちさゝあゝとてこれ年号左の奴  
 てんてん



廿四孝 七賢人

廿四孝ハ元の郭居業作あり典籍便覧子ヲ云々、羅山随  
筆云俗所謂二十四孝者嘉語怪異寔非有道之者  
所述也昔程夫子謂十哲者世俗之論也余於廿四  
孝云云矣と云、あ、竹林七賢とて畫家子てゑる人物ハ  
授もたりとて、晋書嵇康傳子所與神交者惟陳留阮  
籍、河内山濤、豫其流者、河内向秀、沛國劉伶、兄子咸、  
琅邪王戎、遂為竹林之游、世所謂竹林七賢也とあり、  
これ又貝原篤信此論ハ七人放曠荒醉不可為賢と  
了、和傳名數子又ハ二大家此論事と子知言と云々、  
水滸傳の體名

水滸傳百八人の體名を、めそれ義と詳子セざるの多  
り、後その説を、とあり、病閑索揚雄宜如遺  
事子ハ賽閑索小傳、ハ蜀北閑羽の子子閑索あれば、  
子抄ひよせ、耀名あり、花榮、弓とあり、小、李廣  
とあり、閑索ハ名三國志子見、とあり、池北偶  
談ハ名ハあり、夷ハその人ありと云、  
近、阮北集を、閑索挿撰巖歌あり、萬仞  
危崖拔地起、磴道盤空有遺里、土人相呼閑索巖云  
是前將軍子、曾後諸葛、征南來丈八、藏挿挿於此、我  
護蜀志典可微、二子平、與、此外不聞更誰某  
母、乃荒誕、是憑、然而、漠、黔、萬里、境到、慶、俱有、索名



嶺、着果子、虚号是公、安得、威声、至今、永、畧、年、深、世、遠、  
不、銷、餉、此、豈、得、謂、無、其、人、嗚、呼、書、生、論、古、勿、泥、古、未、  
必、傳、聞、皆、偽、史、策、真、と、そ、う、や、れ、ハ、趙、翼、が、史、学、子、精、き、  
そ、う、て、関、索、を、あ、つ、と、す、さ、て、實、関、索、の、實、ハ、似、う、と、い、ふ、と、い、  
俗、語、よ、う、柄、を、き、雁、を、き、を、の、ど、き、と、云、子、同、い、き、り、葛、  
魚、詩、詠、子、見、る、う、ま、病、大、災、薛、永、母、大、災、顧、大、嫂、あ、つ、大、  
虫、ハ、虎、の、異、名、也、鳥、山、氏、の、水、滸、傳、解、ハ、虎、を、大、虫、と、い、  
と、云、本、長、沙、景、欽、と、い、佛、書、子、出、つ、と、そ、う、の、解、甚、あ、ま、  
ま、う、虎、を、大、虫、と、い、ハ、已、小、本、州、綱、目、少、い、で、う、搜、神、  
記、ハ、扶、南、范、尋、養、虎、於、山、有、犯、罪、者、投、与、虎、不、噬、乃、  
有、之、故、山、名、大、虫、と、あ、う、搜、神、記、ハ、晋、の、葛、洪、撰、れ、う、大、

① 主

夷、の、名、を、い、め、て、こ、う、云、え、る、う、い、れ、り、と、北、齊、の、時、子、諸、州、  
の、鎮、兵、を、發、す、付、此、符、子、銅、虎、符、あ、つ、を、れ、と、北、齊、書、子、銅、  
獸、符、子、他、れ、う、北、齊、書、ハ、唐、の、世、小、撰、と、い、ふ、子、あ、つ、て、唐、の、諱、  
を、避、て、虎、を、獸、と、い、ふ、と、い、ふ、と、あ、つ、た、れ、バ、大、虫、と、い、ふ、も、り、  
諱、を、さ、す、も、り、起、れ、る、と、い、う、回、ハ、云、鳥、山、氏、の、解、ハ、長、沙、景、  
欽、と、い、佛、書、と、い、ハ、何、も、サ、ハ、ひ、ら、う、と、い、う、五、燈、會、元、子、  
長、沙、此、景、欽、和、尚、勇、悍、あ、つ、と、い、ふ、人、あ、ひ、と、云、大、虫、と、い、  
と、い、う、と、い、う、の、あ、を、傳、人、訛、足、る、もの、の、お、り、を、再、按、ハ、仏、説、  
陀、羅、尼、集、經、の、畫、毗、俱、知、像、法、子、作、曼、荼、羅、結、界、於、中、  
誦、咒、一、切、師、子、大、虫、禽、獸、水、牛、白、象、囉、周、朱、囉、水、等、  
皆、不、能、害、と、い、ふ、と、い、ふ、う、ま、う、兩、頭、蛇、解、珍、雙、尾、蝎、解、玄、



といふに、明の陳章侯が終するは、解珍解玄も各半を  
手子持る、弓を蛇小喻へ弓筈を蝎に比し、さうぞたる  
名も又、旱地忽律朱貴の忽律ハ獅子の垂名ある、  
殊どさうものゝ

西方聖人

文中子、或問、仏子曰、聖人也、曰、其教何如、曰、西方  
之教也、とあり、これよりて世に西方聖人を佛のものとす、東  
坡集小、西方真人誰所見、註云、西方真人被七宝後双孩  
厚後倪、お、岳柯が程史子、余嘗得東坡所書司馬溫公  
解禪偈、其精義深韞、真足以得儒教之同、特表其語  
而出之、偈之言曰、文中子以佛為西方之聖人、信女

一 三

文中子之言、則佛之心可知也、また元の沙門祥邁が  
辨偽録に、史志経云、孔子在魯、老子在周、以魯聖周  
之洛陽、故在西方、蓋指老子為西方聖人也、云、辨曰、  
此夫子推佛為西方大聖人之語也、味、周老子在周  
孔子在魯、故指老子為西方聖人とありて、自注に、唐  
琳法師對太宗之表、張丞相作護法論、皆引此文、仏  
西方聖人也、とあり、さてこの西方聖人とあるは、列子  
小意で、列子ハたゞ西方聖人とのみあり、佛とも何とも  
あり、又文中子よりて始めて仏の稱せしあり、後世  
異論あり、あるは、貝原篤信の自撰集に、西方有聖人  
辨あり、云、世有一人之私言、而後為天下後世之通論



人皆信之而不疑者此迷衆之言不可不辨坦商通  
篇曰列子述孔子言曰西方有聖人倭私者以為指  
釈氏而言皆妄也國語註曰周詩誰將西歸西方之  
人謂周也孔子果有此言謂文王也於此曲何有篤  
信按羅泌路史云列子所稱西方之聖人者蓋指  
文王也今并按之坦商羅泌之言恐可為得之矣莊  
子讓王篇云曰伯夷叔齊二人相謂曰吾聞西方聖  
人似有道者試往觀焉分明是指文王蓋周在西方  
故文王為西伯云夫仙法入中國也後漢明帝之時  
孔子未可知佛之為人易得有其議論乎是必後世  
倭佛者所附會也云云劉氏鴻書子原始秘書云引

離太率同孔子孰為聖孔子亦稱葛天氏無懷氏為  
西方聖人也其高之世封文王為西伯居于西方云  
曰西方聖人云云乃云云西方聖人之一語云云

日を吞むと多て孕

朝鮮征伐記子載す豊老周の朝鮮王へ賜る返翰小  
予當于托胎之時慈母多日輪入懷中とあり俗説と  
自授かといふ云々云々云々云々云々云々云々云々云々  
台山沙門陽勝元是能登國人其父僧善送俗姓紀  
氏也母亦同夢吞日光即有娠胎云々云々云々云々云々  
姓三國氏云母清魚氏恒仰朝曦念誦多日光映曾  
而振不唐土云々云々云々云々云々云々云々云々云々



呉氏孕而夢月入懷已生策及權在孕又夢日入懷  
以告堅曰妾昔懷策夢月入懷今又夢日何也堅曰  
日月者陰陽之精極貴之象吾子孫其興乎とあり豊  
公いふまでもなく孫權も公孫氏此人にあらず且陽勝日蓮  
各僧徒の傑出といふなり

ハ百屋お七

世人の口碑に傳ふハ百屋お七が事實ハ流布の書ハ江戸  
若用集子にあり、それ中ハ湯島の天満宮へ松竹梅  
此額をのせしが自書きて奉納したると世に傳ふれど、そ  
の裏ハ谷中感應寺ある祖師堂に常在灵驗山法華  
藏子一と云額を、お七が十一歳の時書て、延宝四年辰春二

月と、落款ハ年月をあらわしたるを傳へ訛りあり、さて罪をゆ  
ハ十六歳の附れとて、天和二年戊二月あり、美ふも駒の  
吉祥寺あり、ハ世にハ、これに實ハ小石川指谷町あり、天  
台宗にて南縁山園乗寺といふ寺あり、お七が法名ハ秋月妙  
栄、天和二年戊三と石碑に彫てあり、天和癸丑集といふ、天和年号  
元月廿九日、此江戸大町とあり、書して十三卷あり、その書ハ巻尾三  
卷ハハ百屋お七の事のことを詳にありたり、此書ハ當時の記  
録にれがさうある事を書き、ハ、お七の事ハとやく、浄土  
に依りて、歌舞妓狂言もせし、小兒女お七の語柄とあり、  
とくをあり、ハ、幼くハ、お七の事ハとやく、浄土  
あがり、人々もその行を、兒童の口すさうも、の唄を



まけそとありしう今もそれなりありて街にハをうくそ  
あせうやうそをえそとありふのやううのいふふうふ唄乃  
濫觴をやりふふき山唄をありあり松の葉れ類は松竹梅と  
云冊子あり、その中子載る涼の唄は文句は、百屋の娘お七二  
そ恋ぢのやれううふりれき正をあうて罪に死ぢい  
子きふうううふとえうう、うれはこれをやうてうて  
まうけたうとのあうん

遊女總角が世代

世の口すすふ高雄七代落雪三式總角一代といふとあり、高雄  
ハ古人の考あり、世代も事蹟といふ明りあり、按ずり、總角  
を一代子ハあり、西巴危言、五年、三浦屋、甲左衛門内小











甲乙人

寺院の制札は軍勢甲乙人といふとあり、この甲乙人といふ  
 八條きこひあり、その中あり、己ふ今もありて一二と上下と  
 ういふや、そのうち次第とて、さういふ、古写本に、藤原集不  
 甲乙といふ、注小、おと、殿とあり、軍防令義解子、若、有、先  
 降甲乙斬首五級、丙丁巳級、次降戊巳斬首五級、庚  
 辛巳級、若、則、是、戊巳、雖、不、得、為、先、降、而、其、功、勲、過、多、  
 於、次、降、之、人、即、以、甲乙丙丁戊巳、庚辛、為、歷、名、次、才、  
 之、類、又、三、陣、列、之、法、一、隊、十、楯、五、楯、列、前、五、楯、列、後、  
 楯、別、死、兵、五、人、即、以、前、列、廿、五、人、為、先、降、後、列、廿、五、人、  
 為、次、降、とあり、今抄云、たとへば、

某國某郡軍團某隊

先鋒甲乙某  
 先鋒丙丁某  
 先鋒戊巳某  
 先鋒庚辛某  
 先鋒壬癸某

これにて甲乙人のこと明あり

男子化装

男子化装す、とて、白河院の頃より始り、さういひ、あるひハ、  
 羽院の御時、子、装束を強張、い、く、く、と、装束をあ、と、あら、  
 ち、ハ、花園大長のみ、を、め、め、れ、一、故、仰、せ、な、れ、一、六、その、時、







一國史子も又えう、江村きふのてあハ、畠人傳も志  
ろて人のあをこるなり、安永五年世上吉壽のりれ、以尋あり  
小都て書上たる者十餘人、及ぶ、江戶れ人子て、百歳以  
上子く九十歳を取下とい、大方武家の中吉壽の人多し、その  
中おあが池れ大工存満といふもの、祖母百廿二歳子あり、これ  
老婆ハ百屋おせが市解の小袖を裁縫せり、またれり  
一とつとあて我子又えう、

嬰兒の手あて

嬰兒ハものいぬをれられ、ずくのともとく、やとり察  
て養育も治療とするものなれ、小兒科と啞科ともいふ、  
啞をわつうあす同、とら、小兒の養育治療は書もあす

やれ、されど余うて、五雜組、保嬰論云、養要小兒安  
須帶三、分、織、与、寒、此、格、言、也、終身守之可也、と、知  
言、つ、ふ、因、婦人産後乳れ、と、さ、もの、面、豪、あ、もの  
ハ乳母をもて、嬰兒を養ふ、つれと、貧賤子、りて、ハ、れ、子、充、れ  
食ふく、と、て、ハ、嬰兒の病を、引、つ、を、す、と、常、と、を、とな  
る、を、こ、ろ、乳の粉、く、つ、物を、製、して、坊間、子、嚙、く、もの、あり、世、乃  
乳、も、り、き、嬰兒を、救、ふ、と、その、功、最、多、く、あ、れ、と、坊間の、も  
れ、あ、ひ、つ、その、製、法、魚、れ、もの、あり、予、東、上、氏、より、き、く、製、法、精、且  
す、た、れ、と、い、ふ、て、

餅米の寒、晒を、あ、く、と、き、や、あ、ひ、の、糊、の、如、く、す、茶、碗  
子、を、を、い、や、一日の、食、料、子、充、つ、水、銘、一、匙、を、う、た、の、寒、晒



の中へ入るるありけれは詠ふ、米拾融化してとさういふくさ  
るあり世よしてハ砂糖を用ふるようくさ、焼鹽白牛酪二  
の二味桐子大に大るる、世よしてハ二味をたれず鹽ハ膠中  
へ入るる、言ひくあるとその切あり、白牛酪ハ鮫皮にておろし、末と  
して入るる、さてその飲ませるハ常のどきよう、生でよく  
よく飲ませるる、嬰兒の飲ませるる、

天時占候

古語云朝霞不出門、暮霞走千里、之、朝霞ハ朝方、暮  
霞ハ夕やけなり、朝やけハ雨、夕やけハ晴、兆ありといふ諺あり、  
年ごろ氣むるも果してあり、俗間いひ傳ふる天時の占候、  
一、今たふく龍胎するものお像をこふ、一、己時、晴る雨

二十

ハ華をそる、又未時、雨ハ、  
子晴る雨ハ、日あり、雨ハ、  
雨ハ、朝方、鳥あけハ雨、夕方、鳥ハ晴を主る、又朝夕、  
で晴ハ風吹る、兆あり、鳥ハ泉流、井水も飲ま、雨ハ、  
と、雨、てその滴を飲め、故小雨、んとするを、知て飛鳴す  
と、ハ、蜂、蟻、此、群、飛、ハ、凡、の、や、兆あり、お、齋、く、ど、く、お、  
動、ハ、雨、の、兆あり、山を望む、と、足、ハ、雨、ハ、晴、天、ハ、き、  
ゆ、り、の、け、ハ、これ、ハ、た、ハ、き、ん、ハ、み、を、た、れ、  
四五歩も退きてこれを、見、  
錢、の、足、ハ、  
この水底に錢とおや、





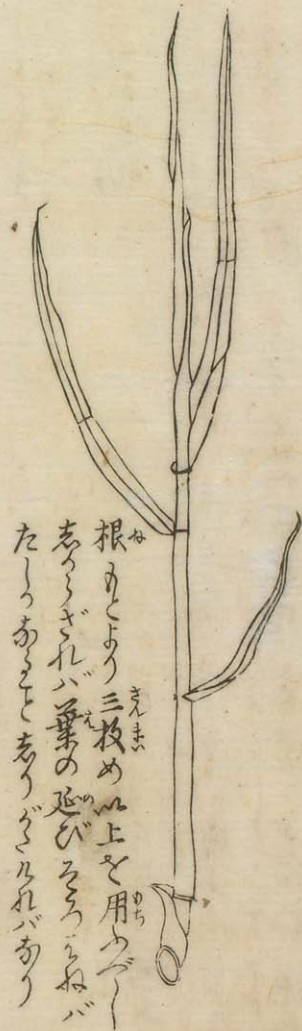






この節よりきりとあつた大水いづれとあつて、りうんがあら  
 へ出水すくぬ、五ヶ月、それハ節のありやうを定むべきか  
 里月を知り、ハ芦葉を中央より二ふおて二枚とす、それを二  
 枚のあつて又三ヶ月おろし開きえまハおめ、六段つくりあり、さて二  
 ルを月子配着するふ、正月より三月までハ出水の節はあつた十月  
 より三月までハまゝに北出する時あり、されハ春の三ヶ月と冬に  
 三ヶ月とをハ捨て葉の中におめ、四月より九月までの六  
 ヶ月を割つるとあり、葉の北の方の一段と四月二段を五月と、  
 段より九月まで順に配着して其月より満月たるまでの節あり、  
 某月出水とつくと知り又その一ヶ月北中と上中下と十日づつ三ふ  
 割てえれ、ハ上旬の出水、下旬北出水とつくと明白に分ること

かく、其験救年なり、見ると聊もたふとれ、と小西米重が抽  
 ぐりあり、されハ此事をのり、つて益ありとをえ、ハ今こそ載て  
 その圖を出せん、



根より上より三枚め以上を用い、  
 あつたされハ葉の延びるうへに  
 たしつあつとあり、されハあり

かくのとく順よりつくりあり





この圖に如く四月より九月までを順に引て見れば、節のありとこ  
ろよりて某月出水といふと知る事あり、今の圖よりハ七月十日  
ころれ出水あり、餘の月もこゝにふあざうて知るべしと穂立手引  
草子に云

雨足風手 雪海

風より初と動うすて手あふとく、雨ハ一むらうとるるも是あり  
り如くして風の多雨は是といふとあり、雨の足ハ唐山よりこふ  
る、雨足とも雨脚とも云、晋の張景陽が雜詩に雪浪臨ハ極雨  
足瀰四溟、又云醫病結繫、雲毒散而足と文選よりあり、魏東坡  
の詩に疎雨脚長を云、わがあふ平蕪盛集より云を引るべし  
す、雨より云を云さく、雨とく雨此ありハもの久晴陰日記に

八月廿四日雨のありてのやうさくあふれあり、雨のありとも  
おつとあつと云ふ事あり、おを引ひなげば、雨と云ふ事あり、風の多と  
いふ事ありて、力の多さより、白樂天の謡曲、小手風神、風は吹く  
されてとあるを、拾葉抄に、風は手と云ふ事あり、風と云ふ事あり  
ありと云ふ、古より風の手と云ふ事あり、ハ、手は風を引る事あり、ハ、五  
渥詩に平生無疾如風手、力振其綱、事所難と云を援とす  
ま、こゝに如風手と云ふハ、無疾をなす、風の如き手と云ふこと  
あり、風の手とハ、自その義別あり、おと雪海といふとあり、清  
の表、故に、游夢山記に、食頃有白練繞樹、僧喜告曰、此雪  
鋪海也、初濛々然、鈴銀散綿、良久渾一、斤青山羣露  
角尖、類大盤、凝脂中有筍脯、真現狀、俄而離散、則萬



峯簇々ハカシツク乃還原形カハルゲンシタマヒとてとて吳梅村ウメイジュンの雪海ユキカイと稱いふす詩しあり  
足願タカラ豐堂漫書トヨドウマンショ子晦菴劉少師健クワイアンリウセウレケン為庶僚ケシロリョウ時奉命往トキホウメイキョウ  
祀華山イニハカ正マサニ及夏キタナ日晦菴クワイアン与容ヨウ高登カウカウ顧見コヘン山下サンカ白霧弥ハクキミ  
漫若マンニョク大海ダイカイ然而山頂トノイタキセキ赤日アカニチ了無纖翳リョウムセンイチ佩ヘイ夕シヤク齋サイ詠物エイモノ  
詩選シゼン子載コノす元ゲンの黃石翁ワウシキウが望雲ゾウウンの詩し、日出ニチイデ五丈高ゴサウカウ白ハク  
雪ユキ浩如海カウシカウとてとて中ナカにニ已モト不レ雪海ユキカイの地チむきをミとて

雪の竿ユキノササ

信州シンシュウ越後エツゴ北陸ホクリクなり雪ユキれ深コナきをシ知シふ掉ササ子コ一丈イチサウまでの寸サチ雪竿ユキササ  
刻キキして水ミヅのミヅささササとてとて如ニくみミとてとて雪ユキれ竿ササとてとて夫木フキ  
鈔セウ子載コノす大炊オホノベ門カド為タカシ佐ササねネふ  
越エツの山ヤマなり竿ササのうウひヒをヲさサき日ヒをヲさサ雪ユキ小コなりとてとて雪竿ユキササ







とあるに在ありきて越の雪ハ世人のたとふさふもいひ出ての國  
人のあつり雪譜とよむれもあれど、ふみ越厚より越前を  
の國境おも湯尾峠ありふとハすつといふが五尺さうりまで大  
雪ハふむ一丈さうりも深くつめれとぞ、まゝ越前大野能登の色  
いづれを越厚より雪ハちふ深くとぞ人

節序の賣物

せん不き<sup>せん</sup>  
 南畝翁の草れすまゝはゆらぐりのふに月の削掛ハ門松の本と  
 つり又ハ折るも削りあり二三十年こゝろ削けくとして夢あり  
 けハ誰もわづものかゝ盆の精霊祭の園子をえ夢を束ねばう  
 す引家もおもしろあやめ霊柩の杉垣をつくりとも我よりいへん  
 はありき七月十九日の第一は精霊さるおびひくとて重相



を崩せしものを買ふれば廿八俵割りのとて賣り終てむて  
ハ飯も汁も親と買ふ食ふ五月に本所の預めハ纏  
を源々の紙でつづき俵も半々今ハおハ盆大鼓園  
扇を敷として紙をもちしものをさうり来りうこれちやぬよ  
ろつに預物も價ちきめのとありてゆきハすれハく耐  
不達ひて賤のかきを歎くも上りもさうり錢のかきハ必然乃  
程ありとさうりハ記ハ文化ハとせぬ以翁ハ全杉ハ橋居のそり  
ゆゑあるされハおとバ三十年といそれハ明和の以前  
奉々人出り  
きんせハバハ（んかん）多シ、多シハ千子  
近世武家編年略ハ寛文八年十二月十六日新有  
御旧例江戸士民之家ハ仕之奴僕ハ二月二日  
二十六

ス放遣之期末年以後須ハ三月五日為期又安富  
随子江戸公人三月五日出りの事、その前ハ二月二日  
出りしハ明暦三年丁酉正月十日江戸大穴事ハ、それ  
年三月五日出りすぎり作とありて夫ハ毎年三月五  
日とありしハ見えさうハハ説いづれうづろんむりりハ  
小昔ハ家来家此出り二月二日ありハ寛文ハ申年より三  
月五日出りしハ、それハ今ハ越好ありさうり冬ハ入  
二月二日ハ一統國ハこれハ是のむりの名残ハありさうり  
ハ年二月一日江戸大穴あれハ安富のつそれハ明暦大穴ハ寛文乃



火事とあやまり傳へし次第は、二月十六日火あきより、  
その出より三月五日までのむいたふ、そのも通例とあはる  
あづ、

あきせ

召つひの考子時の衣服と給するをあきせとて、文字ハ仕著  
あきハ四季施をいふ、書言字考子より、古抄の曾我拙  
諸子四季をいふ、此小袖をたまひとふことあり、これハ四季  
施とて、人々を義におきく子とて、おひ居るより、他日臨  
の中山傳信録に春秋四季賜袍掛衫禪とて、そのあき  
をいふ、一ハ、鑑真東征傳に四季給時服ともあり、  
あきハ四季施と書る、施の字は、やうあり、四季著の約給あり

ア、

彼岸

彼岸といふは、佛諸あり、到彼岸といふとあり、さるを曆本に  
書くより、春秋の時の名目とあり、はつたのやとあり、いひ

そのらん曆林同書集をいふ、このころ、此書も、たう、證授  
とて、説も、今ハ彼岸を農事の助子の、曆にあはると

とて、やう、天所信景が鹽尻、日本後紀、延暦二十五年

年二月、官符、五畿七道諸國轉讀金、剛般、經云、

宜使國分僧、春秋二仲月、別七日、存心奉讀、之、

經也、天信景云、春秋二仲一七日、佛事、蓋和俗、彼岸

會權興、欲讀金、剛般、經、而起乎、然、延暦二十五年



春分<sup>しゅんぶん</sup> 中日<sup>ちゅうにち</sup> 彼岸<sup>ひがん</sup> 會<sup>え</sup>之始<sup>はつし</sup>也<sup>なり</sup> と云々<sup>と云々</sup>、この説<sup>せつ</sup>中<sup>ちゅう</sup>に傳<sup>でん</sup>徒<sup>て</sup>を  
どが附會<sup>ふくわい</sup>の説<sup>せつ</sup>と懸隔<sup>けんかく</sup>なり、

ハ朔白小袖

いまよりハ朔<sup>しゅく</sup>白<sup>はく</sup>小袖<sup>せうそで</sup>を著<sup>き</sup>るむうよ  
今<sup>いま</sup>吉原<sup>きちげん</sup>ハ朔<sup>しゅく</sup>女<sup>にょ</sup>の多<sup>おほく</sup>なりハ白<sup>しろ</sup>小袖<sup>せうそで</sup>を著<sup>き</sup>るむうよ  
其<sup>その</sup>のあつりけり、その説<sup>せつ</sup>洞房<sup>どうぼう</sup>諸國<sup>しよこく</sup>吉原<sup>きちげん</sup>大寺<sup>だいじ</sup>をどし見<sup>み</sup>る、  
其<sup>その</sup>の瘡<sup>かさ</sup>をさうひり付<sup>つ</sup>れよとあひとも、又<sup>また</sup>ハ夕霧<sup>ゆふぎり</sup>が病<sup>びやう</sup>年<sup>ねん</sup>あがき  
を迎<sup>むか</sup>へしうさうさともども、と時<sup>とき</sup>候<sup>こう</sup>よりううて小袖<sup>せうそで</sup>を著<sup>き</sup>用<sup>もち</sup>す  
るとハ遊女<sup>ゆうぢよ</sup>も俳優<sup>おひやく</sup>もよとあひさうとすれハあつり、あつりあれど  
ハ朔<sup>しゅく</sup>白<sup>はく</sup>きを用<sup>もち</sup>すともあつり、その證<sup>あき</sup>ハ吉原<sup>きちげん</sup>礼家<sup>れけ</sup>の  
服色<sup>ふくしき</sup>あつり、<sup>きん</sup>宗<sup>そう</sup>五<sup>ご</sup>大<sup>だい</sup>草紙<sup>そうし</sup>も古<sup>ふる</sup>ハ八月朔<sup>はつげつしゅく</sup>より袴<sup>はか</sup>をめ  
たるとしてとあれハ袴<sup>はか</sup>をききと己<sup>おのれ</sup>は其<sup>その</sup>事<sup>こと</sup>とす、ハ朔<sup>しゅく</sup>白<sup>はく</sup>遊女<sup>ゆうぢよ</sup>

の綿入<sup>わたいれ</sup>を用<sup>もち</sup>すハ地の<sup>ち</sup>なるのあつり、あつり、<sup>あき</sup>秋<sup>あき</sup>州<sup>しゅう</sup>ハ七<sup>しち</sup>月<sup>げつ</sup>ハ朔<sup>しゅく</sup>  
白<sup>しろ</sup>のつとときと七<sup>しち</sup>月<sup>げつ</sup>ハ朔<sup>しゅく</sup>白<sup>はく</sup>のきあり、秋<sup>あき</sup>ハ西方<sup>せいほう</sup>金氣<sup>きんき</sup>の  
司<sup>つかさど</sup>り付<sup>つ</sup>あり、金<sup>きん</sup>の色<sup>いろ</sup>ハ五色<sup>ごしき</sup>子<sup>こ</sup>取<sup>と</sup>て白<sup>しろ</sup>あつり、<sup>あき</sup>秋<sup>あき</sup>ハ西方<sup>せいほう</sup>金氣<sup>きんき</sup>の  
を用<sup>もち</sup>す、<sup>あき</sup>秋<sup>あき</sup>ハ西方<sup>せいほう</sup>金氣<sup>きんき</sup>の  
とより附會<sup>ふくわい</sup>して、古<sup>ふる</sup>礼<sup>れい</sup>のむうとこそいふべし、

純子の上下

礼<sup>れい</sup>服<sup>ふく</sup>ハ貴賤<sup>きけん</sup>もあつり、<sup>あき</sup>秋<sup>あき</sup>ハ西方<sup>せいほう</sup>金氣<sup>きんき</sup>の  
ハ龍紋<sup>りゅうもん</sup>の小紋<sup>せうもん</sup>をとり、<sup>あき</sup>秋<sup>あき</sup>ハ西方<sup>せいほう</sup>金氣<sup>きんき</sup>の  
著<sup>き</sup>る、<sup>あき</sup>秋<sup>あき</sup>ハ西方<sup>せいほう</sup>金氣<sup>きんき</sup>の  
の上下<sup>うじやう</sup>を用<sup>もち</sup>す、<sup>あき</sup>秋<sup>あき</sup>ハ西方<sup>せいほう</sup>金氣<sup>きんき</sup>の  
のあつり、<sup>あき</sup>秋<sup>あき</sup>ハ西方<sup>せいほう</sup>金氣<sup>きんき</sup>の



永代の記録は、まき柳、某、つゝ人の、姓、うの、襦、うの、股、うの、あ、羅、  
 の、雨、織、綴、あ、登、足、袋、高、木、履、下、人、は、傘、と、と、通、う、る、と、  
 つ、と、と、と、え、あ、く、白石、透、つ、む、り、あ、う、う、き、仕、官、の、人、は、大、う、綴、子、  
 綴、子、わ、れ、裏、付、け、上、下、を、用、ひ、け、れ、と、承、り、及、び、け、あ、う、人、の、親、父、は、  
 う、き、み、役、と、つ、あ、世、の、も、と、あ、う、も、た、と、あ、う、人、は、て、  
 の、以、五、十、中、子、て、も、あ、う、あ、う、ふ、唐、織、の、綴、子、け、上、下、な、一、具、  
 て、日、夜、の、眠、を、し、て、あ、の、う、れ、さ、を、う、ふ、あ、と、あ、も、存、生、子、て、  
 し、が、その、上、下、の、き、れ、子、て、り、と、て、それ、子、息、の、時、茶、入、の、袋、あ、  
 ら、れ、け、と、それ、り、も、う、う、う、花、色、の、小、紋、あ、綴、子、あ、う、ひ、き、と、あ、  
 う、あ、う、あ、う、綴、子、の、上、下、を、着、用、す、と、あ、う、あ、う、あ、う、  
 して、日、夜、の、眠、を、し、勤、め、う、れ、う、う、あ、の、晏、子、が、一、狐、裘、三、十、金、の、

類たぐひ少すく 仰慕カミガハすべし

野の  
ぢの  
種名

國國雜記子孫ちくしふそろこふを傳へ、れも種の名所ありと  
 云此種いふへ國れこれより土のそはうぐさそと云  
 それも振いさうりけむ、

音おと子こきく 所ところちをとりハあとうてこころ種もなき夕うな

とをさうし、これ孫ちよふハ武蔵國新座郡野寺村にありをき  
こころ此のあさうあひひとさう墓蔭づの生いてゆゑこの常よ  
まも大きあさうてきさハ土地のりれ彼つこれやハあさハ墓蔭  
もあさきさうさうとて、あうてえれどおひおさけしありち墓蔭の  
いさささハあさうあうてえんとてさうつとひてあさうさうあう  
いさささハあさうあうてえんとてさうつとひてあさうさうあう



堀たれバ鐘の龍頭ふりあせり、どりぎまやひやぐそその種  
をあり出して、そそ古種をほす、その秋ハ野本寺とあり、こ  
ま郎回國雜記ハ、野本の種あり、暮秋のつるをりとして  
たれハ土人ハいそ種と稱す、そ、新地箱の地がうあり、

黄金の壺

河内が、赤土村とあり、そそふむり、山中心石の蓋をせ  
壺の土中よりいさる現れ、そのあり、そそふむり、そのあり、これ  
又、そのあり、古墳を、そそやわんと、そのあり、あり、  
安永三年の七月十五日、ある人、そのあり、そのあり、  
又、そのあり、そのあり、そのあり、そのあり、そのあり、  
き、そのあり、そのあり、そのあり、そのあり、そのあり、

堀たれバ鐘の龍頭ふりあせり、どりぎまやひやぐそその種  
をあり出して、そそ古種をほす、その秋ハ野本寺とあり、こ  
ま郎回國雜記ハ、野本の種あり、暮秋のつるをりとして  
たれハ土人ハいそ種と稱す、そ、新地箱の地がうあり、  
黄金の壺  
河内が、赤土村とあり、そそふむり、山中心石の蓋をせ  
壺の土中よりいさる現れ、そのあり、そそふむり、そのあり、これ  
又、そのあり、古墳を、そそやわんと、そのあり、あり、  
安永三年の七月十五日、ある人、そのあり、そのあり、  
又、そのあり、そのあり、そのあり、そのあり、そのあり、  
き、そのあり、そのあり、そのあり、そのあり、そのあり、  
の、そのあり、そのあり、そのあり、そのあり、そのあり、  
大坂の所、そのあり、そのあり、そのあり、そのあり、そのあり、  
い、そのあり、そのあり、そのあり、そのあり、そのあり、  
の、そのあり、そのあり、そのあり、そのあり、そのあり、  
い、そのあり、そのあり、そのあり、そのあり、そのあり、  
あ、そのあり、そのあり、そのあり、そのあり、そのあり、  
ハ、そのあり、そのあり、そのあり、そのあり、そのあり、  
世、そのあり、そのあり、そのあり、そのあり、そのあり、

